

【エッセイ部門・奨励賞】

映像より

私立第一学院高等学校 第2学年 菅原響

たとえば赤子の微笑みであったり、たとえば他愛ない会話であったり、そういう人が織り成す景色が愛おしい。平和の日々で、当たり前にも温もりを感じて、爽やかな空気を存分に吸えて。

幸せだから些細な不幸が気になるけれど、そう思うと改めて幸せだと感じるので、そう感じられる僕の生きるこの場所は、やはり大変美しいと思う。されどこの美しさは、世界を俯瞰してみると、希少で素晴らしいものなのだと気付く。

遠き空のさらに彼方では、今も爆撃音と悲鳴が絶えない。言葉にすれば淡白だけれど、このことがどれほど惨いことかを映像で知っているつもりだ。

表層を見ただけで物事を語ることの罪深さはよく理解している。その上で、それでも映像という表層から痛みや生々しい感覚まで想像を巡らせて感じたことを語ることで、何かが生まれてほしいと、何かが終わってほしいと、切に願う。

強く衝撃を受け、生まれてはじめての感覚に襲われ、今も深い影が胸を締め付ける。その出来事について願いを込めて語る。

昨今のロシアによるウクライナ侵攻。戦争、兵器、被害者を教科書でなぞっていただけの僕の価値観は大きく変わった。大きな争いなどもう起こるはずはないのだと、教科書の文面を感覚として捉え切れず眺めていた、それでよいはずだった。

連日の報道の映像に、はじめは映画のシーンを観ているようで、『実際に起きていること』という感覚が湧かなかった。されど次第に生々しい映像が増えモザイクが画面を埋め尽くすようになっていき、瓦礫の上を無残に横たわるぬいぐるみ、一人で泣きながら歩く幼い子、様々な怪我人の巻かれた包帯に滲む鮮血、ようやく『実際に起きていること』という感覚が湧いた。さらにその感覚をより強めるものが、ウクライナ兵がドローンを操縦している映像や、スマートフォンでウクライナに残った家族と連絡を取り合う人々の映像だった。同じ時間に存在することをそれらの映像に映る機器が証明してくれた。

インターネットを開くとより生々しい映像が溢れており、モザイクのない映像もあった。モザイクのある映像もモザイクのない映像も同じ事象を捉えていることは変わらない。されど見た時の辛さはモザイクのない映像の方が大きく上回る。痛みを目の前にしておきながら、酷くそして下劣な表現だけれど率直に言って吐き気を催した。命がこんな形で朽ちるのかと、それ以外考えられなくなり、頭の中を靄がかかったような感覚に襲われた。

それから二ヶ月ほど戦争のことしか考えられない状態になり、広島と長崎に投下された原子爆弾の被害者や、紛争が続く国の子供たちに思いを馳せていた。なぜ世界はこんなにも残酷で痛いのだろうと、ベッドの上仰向けになり天井に頭の映像を映しながら問い続け

た。されど納得のいくことはひとつも思い浮かばなかった。

戦争とはなんだろう、争うとはなんだろう。

多くの人に問うてそれぞれの話を聴きたい。痛みは誰もが恐怖しているはずで、朽ちる意味もそうなる未来も想像したくないはずだ。笑い合える家族や友人、様々な楽しい体験や思い出、それらは失いたくないはずだ。どんな心の渇きもやがては喜びで潤うはずだ。殺人を犯すための真つ当な理由はないはずだ。頑張ればみんな生きられるはずだ。理想論と一蹴せずにそういう可能性に近付くことを考えたい。命は尊いという言葉の意味をあっけなく葬られた命を見て考える世界であってはならないと思う。生き中での様々な奥行きから考えられる世界であってほしい。

映像は映像であってどうあろうと表層でしかない。されどウクライナの映像から感じ取ったものは痛みや生々しい感覚、視覚や聴覚だけでない全身の感覚を震わせた。深く考えさせられ、その過程で構築された辛さは消えることはない。胸の締め付けが止むことはない。

様々な映像は大事なことを僕に与えてくれた。

この語りの終わりに、悲しみばかりの話では何かになるとは思わないという僕の信条から、美しいこの場所の美しい映像を連ねて、『我々の故郷』を、誰にでもあるはずの潜在する故郷をわずかでも浮かばせて、何かになる結びとしたい。

たとえば母と父の愛情に包まれること、たとえば朝カーテンを開けること、たとえば鳥のさえずり、木漏れ日の揺れ、小川の流れる音、たとえば喧嘩、謝り合うこと、「好き」と言い合うこと、たとえば明日に思いを馳せること、過去の栄光に浸ること、たとえば平和だと感じること、たとえばこういう『たとえば』を重ねていくこと。